★わたしの意見

神戸市少年少女合奏団によせて

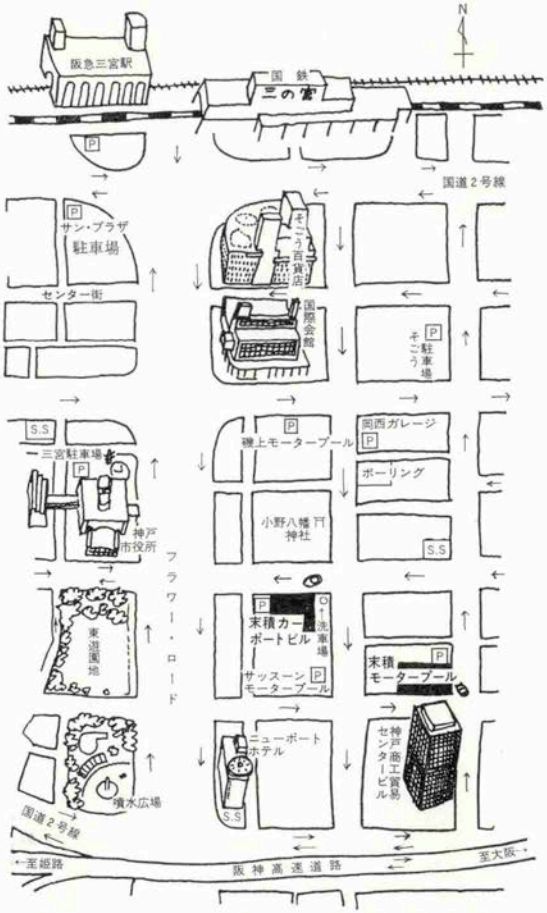
小杉博英
〈神戸少年少女合奏団会長
大阪音楽大学教授〉

良き市民良き文化人として現在の幼ない子供達が育つにはあまりにもトゲトゲしい昨今の社会情勢ですが、これらの遊び盛りの子供達が諏訪山小学校にある市民音楽教室で合奏の団員（四才から十五才）が一堂に集り古き良き時代の良き音楽の合奏に取組む姿はプロのそれとは別なほほえましい姿であり、合奏を通じて他人と心のつながりを求めて懸命に耳をそば立て、目を見開いて、音楽に打込むさまは私自身をも引きしめ厳しく自分を見直す事がありました。この様な幼ない時代の合奏の練習は個人プレーには見られない良さがあり、今、自分達が何をし自分が今、何を成すべきかを知る上に、大いに役立つと共に大人の社会とは別な感動をおぼえます。そして今成すべき事の善悪の判断と正しい行動を即座に会得する事の出来る精神を造る事にこの合奏団の根源が在ると信じています。今日では音楽における幼児教育は特殊な教育ではなく、生活化され、人間の社会生活における必需品の感があります。このように音楽が社会化され人々を楽しませ、そしてよろこびをあたえるようになった反面、個人のプレーに走りその結果多くの欠陥、又は反対作用等多くの問題を残しているようです。明確な計画性、目的をあきらかにした教育をし、音楽の低俗化をふせぎ高度なクラシック音楽を理解出来るように進んでほしいと念願しております。幼ない子供達が合奏教育（団体教育）によって自主性と自活力を引伸ばす心を見出してくれればと思います。たとえ、はじめ子供達が遊びから入ったとしても、やがて正常なそれぞれの未来につながっていくものと信じており、又良き社会人と成る為のそれぞれの段階で合奏の楽しさと厳しさを会得し、音楽を通じて、より強き心の成長を、又将来市民オーケストラの良きメンバーとして、又其都市の文化のバロメーターとも言われる、プロのオーケストラの要めと成るよう子供達共々励みたいと思っております。やっと第一回の演奏会をおえたばかりのこの小さな「ともしび」を絶さないよう各方面の皆様方の御支援を心からお願いします

●三宮の楽しいショッピング・オフィス街への出勤に

末積カーポートビル

近代的な
立体駐車場
150台OK



●普通車30分＝￥100

スピーディな駐車 親切な応待—

■ 冷暖房完備・TV付の
待ち合い室もあります。

■ あさ8時——よる10時（日・祭日営業）

末積株式会社

神戸市葺合区磯辺通4丁目6番地ノ2
TEL 078（221） 9 8 8 7

随想三題

〈第5回日展「愛」畑マス子作〉

「酒」から絶縁状が来ないよう

畑　マス子
〈日本現代工芸美術会友〉

「神戸っ子」の酒徒番附表にわが名が載っているとのこと。驚きました。「飲める女性」に入るならともかく豪の者の順番表、しかも殆どが男性名で連なるうち、女性らしき者はほんの数人でしかない中に選ばれたのですからびっくりする外ないのです。自分ではごく普通に飲み楽しんでいるつもりでも、飲む程に朗らかにしゃべり、ややイチビル方なのでよくいけるなあ、強いなあと量以上に賑やかなのを認められたのかもわかりません。ともあれ酒のみの公認のレッテルが貼られたのですからきっと父親もあの世で「さすがわが娘、よーやりよる」と喜んでいることでしょう。その昔、父は四斗樽をデンと据えて朝食ぬきのコーヒ代りに酒、昼食のお茶にとお酒、夕食には勿論長火鉢の前で晩酌を楽しんでいました。そして事ある度に酒もりの集いを開いて騒いでいるようでした。あの大きな酒樽からコクッコクッとリズミカルに流れ出る澄んだ心地よい音、今でも私の身体の中にあの響きが残っていてなつかしい気がします。そんな酒浸りの家で育ったのですから、ごく自然にアルコールが〝いける〟のもやはり親ゆずりと言う外ないようです。またそんな体質を受けついだ娘は、ああ楽しきかな酒ある人生！と親に感謝しているのですから親娘ともども世話のない円満な家系なのです。

そんな切っても切れない親しい友「酒」をただ一度裏切った恥かしいお話があるのです。今恥部をあえてここに告白して二度とやるまいと誓いを新たにしたいと思います。ある時、フーッと眼が覚めました。そこは確かに私の部屋、友人宅で酒もりをしていた自分がどうしてわが家に、さては車を運転して帰って来たのか、もうろうと冴えない頭で考えても一向に見当がつきません。まず鍵を探しました。狭い部屋の中を何度も探してやっと見つけたのはトイレの中、捨てるようにして隅っこに落ちているのです。さてはトイレに馳け込んだのか？では車は何処に、ガレージに降りてみました。全然覚えがないのにそこにあるのです。三台ずつが向き合って六台並んでいる真中に他の車の出入りも考えず、窓もドアも開けっぱなしで遠慮なく止めてあるのです。何の事故もなかったとはいえ本当に馬鹿なことをしてしまいました。全く酒に飲まれていたのです。思い返すたび震える程恐ろしいことです。心の傷を麻痺させるようなやけ酒をあおるようでは、「酒」に笑われ「酒」から絶縁状が来ないとも限りません。番附表

に恥じない酒のみのルールを守った好ましい「飲みっぷり」をしたいものとそれ以来は心して味わうことにしています。

心の通い合った友と馬鹿話をしながら飲むビールもよし、制作に疲れ気分転換に飲むお酒は次の出発点を見出してくれ、睡眠時間のごく短い時に飲むウイスキーは熟睡の手助けに役立ちます。低血圧の治療に毎晩アルコール気を欠かさないのがよいなどと理由づけて飲むこともありどんな時に飲むお酒も好きで楽しいものです。そして書きなれないこの原稿を書きあげて、ゆっくりとウイスキーを味わいながら読み返している今の私なのです。

弥次喜多酒亭問答

小林　省三
〈サヴォイマスター〉

飲み屋の客弥次郎「寒いな親爺。まず、そこの豚犬猫を一ぺえくんな」

飲み屋の親爺喜多内「なんと、わからねえ。ここは飲み屋だ」

やじ「わからねえか、啼く声合わせて豚犬猫だ。ブキャナン、上物だわさ」（*ブキャナンはスコッチウイスキーの銘柄の一つ。上物也）

きた「おや、大喜利仕込みの悪いしゃれだね。照美の見すぎだあな」

やじ「時に喜多さん、色々舶来の酒があらぁな。そいつの正式の飲み方とやらを、ちと教えてくんねえ」

きた「そうさな。西洋の普通の飲み方は、飯の前にはあっさりの角照とか珍左乃でよ、飯の間は和印だな。飯の後にぁ利久酒、夫蘭丁という段取だぁね。麦酒、宇井好は気の向く時に飲りゃあいい」

やじ「その飯の時に飲る和印とやら、近頃大そう流行だが、いこう難儀なことじゃねえのか」

きた「何の難儀、そりゃあ、赤いなぁ赤い肉物、白いなぁ海の物と、むつかしくいやぁきりがねえ。だが、普通に飲むのにそんなに気どることもあるめぇさ。西洋の酒だといって、いか程さ様に七むずかしく思いたがるのがいこう我らの悪いくせ。何のこたぁねぇ、たかが酒だ、あんまり考え込まぬことよ。たしかに、草淡（*ソータンはフランスの甘口白ワイン）は飯にゃ甘過ぎる、赤は平目にゃ渋過ぎる、と合わねぇものもあるけれど、それとても一度飲んで見りゃわかる事さぁね。又、和印じゃねぇが、上物で夫乱丁乳酸なんざぁ論外の悪だぁね。ともあれ酒はせっかく神様が人間様だけに教えて呉れた楽しみだぁな。ゆっくりと味と雰囲気を楽しむのが先というもの。楽しみながら覚えるのが酒の道だわさ。飲み方よりも行儀だぁな。飲み屋ってなぁ、いわば時間の河の渡し舟。今日の岸から、明日の岸へ仕事終えての渡し舟かな。お客は皆さん、その舟に乗り合わした同じ舟での同じ道中だと思いねぇ。そこで袖すり合うも何とやら、他人への思いやりせえありゃあ、手めえの金で手めえの飲む酒、何の気兼の重い荷よ、無駄にしょい込むこたぁねぇ、というもんだ。ただしだな、お前さんが大金はたいて極上の和印を抜くような上客の接待は別だ。それにゃそれなりの笑われねぇ道があらぁね。それを言い出すと長くなる。そいつが知りたきゃどなたでも、いつでもたずねてごぜぇやし、くわしく教えて進ぜやしょう」

やじ「おっと、こいつぁとんだ音羽屋気取りの三日月長兵衛だな」

きた「何でおれが三日月だ」

やじ「鏡を見ねぇ、眼が細い」

きた「おきゃがれ、男の眼には糸、だぁな」

やじ「鼻をへこました所で、物の本にある独乙の諺を教えよう。曰く〝二十才以前にりりしくならず、三十迄に強くならず、四十迄に賢くならず、五十以前に金持に

なれない男は、結局酒を無駄に飲んだわけだ〟とよ。結構な台詞じゃねえか。酒には美、強、賢、富の徳があるとのご託宣さ。さてここで一九ばりに、一首狂歌としゃれようか」

きた「よかろう、やりねぇ」

やじ「〟物不足　公害もわれをさけの神　しばし上酒（おみき）の気散じぞよし〟はどうだ」

きた「おれも返そう。〟気散じの上酒（おみき）のつけもたまり水　払いたまえと神をやじろう〟。どうだ、こたえたか、大きく溜ってるが」

やじ「いんや、ちっともこたえねぇ。下世話にいって、かりの大きいなぁ、男の自慢だ」

仕事の酒

池田　雅延
〈新潮社出版部〉

関学の学生だった頃は殆ど呑まなかった。親父がからきし駄目で子供の時から機会も必要もなかったのである。たまに帰省した大晦日の夜など、親父とテレビを見ている茶の間へ、「お正月やでな」とか何とか言いながら、お袋が、危っかしい手つきで一本つけてくる。その一本が、テレビの放送が終る頃になっても少しも軽くならなかった。呑み始めたのは、新潮に入ってからだ。入社の時、上役に「酒はいけるか」と聞かれて「ビール二本なら大丈夫です」と胸を張ったら、「二本か、まあいいだろう」という事で、前途は洋々と展けた。

それがちっともよくなかった。ビール二本で釈放してくれるほど世間は甘くなかった。渡世の義理上、朝帰りが日課となった。

家内には仕事の酒だと言ってあるが、無論酒場でする仕事など、精々五分もあれば片づいてしまう性質のものなのだ。仕事の酒から本来の酒に移行した接点が、いつの場合も判然としない、というだけの事なのだ。これは当事者間の呼吸の機微に属するところで、醒めた頭の第三者には説得不能の領域だ。困った事だが、厳密に釈明すべき筋の大事でもないから、すべて仕事の酒だと言ってある。お陰で量だけはこなせるようになった。依然として舌は肥えないが「酒呑みの自己弁護」（山口瞳著）などという、酒なくては叶わぬ先生の本を造らせて貰ったりする役得で、耳の方は随分と肥えた。

この頃は、皆水割を呑むが、例えばサントリーは、わざわざ水で薄めて呑んでもらう為に苦労しているのではない、という、造った人間が酒に託した夢や希いをよく承知していられる山口先生は、大抵生かオンザロックスだ。「止まり木に止まった途端、水割りですか、などと聞くバーテンには言ってやろうじゃないか、ウイスキーを水増しして呑むほど貧乏しちゃいねェや、と」。

こういう話を聞いてから、酒の楽しみが変った。味もわからずに生意気な顔で呑んでいると、酒にも作者がいる、という当り前な感動になかなか出会えない。自然を読む苦心がまずあっただろう、材料を活かす工夫があっただろう、繊細な神経の集中があっただろうと、次々思いを廻らしていくと、いい酒なら声は聞こえなくとも必死に格闘している作者の姿が見えてくる。一途に人間的な悩みを、ただただ美しい液体に置き換えて送って来た作者が見えてくる。

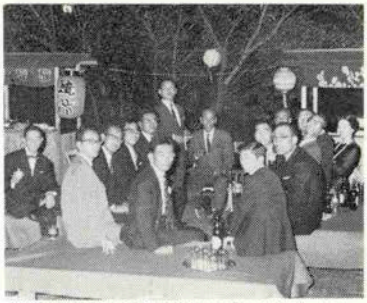
文化とはそういうものかも知れないな。そう納得して酒とつき合ってみると、遥かな広がりと奥行きが段々に感じられて、「酒呑みの自己弁護」のコピイには、「酒。人間の生んだ最も偉大な文化――」という一句が、まず頭に浮んだ。

「それが仕事の酒だよ」と言ってやったら、家内は、「随分肩の凝るお酒ですね」と言った。

□ある集いその足あと

いけばなグループ「ぞく」

瀬良弘風
〈「ぞく」同人・新日本華道会理事〉


須磨浦山上公園野外展のオープニングパーティ

ぞく、変わった名前であるところから、よくその意味を問われるが、別に何んていうことはない。しいて意味付けるとすれば、なににも属さない自由な立場から、幅広い造形活動をやろうとする若手花道家の集団である――ということだろう。三十八年四月に発足して十年余り、もはや若手と呼ぶにはふさわしからぬ時間の経過はまぬがれない。が、しかし、パッションはいまなお若々しく活動を続けている。発足当時、兵庫の花道界はまだまだ古い因習のなかで空回りの状態にあって、若手花道家は中央に向って活動の場を求めるしか道のない、新人不毛の地とまで悪評された時代であった。そのときにあって、次代兵庫いけばな界を真剣に考える純粋な若者十名が集い、神戸新聞会館KCCギャラリーで、超流派的な造形作品展を開いたのが、この変な名の、「ぞく」のスタートである。新人の登龍門的なグループでもあった。

毎月一回の例会をもち、いけばな造形の研究、実技、討論、ときには花道論から、大きく日本花道の次代論など裸で論じ合うまでにエスカレートし、翌年、翌々年とオブジェ展を開催。ようやく充実がみられ、いよいよ積極的な活動へ転化。四十一年には神戸「そごう百貨店」において大花展を試みた。結果大好評を拍し、不毛の地に若草が芽生えたのである。この勢いに乗じて、ますますエキサイトした若い活動力は、全国に先駆け、屋内から出て屋外の大空間へ挑もうとしたのである。しかも、会場を山上にと意見一致はしたが、大した冒険であった。これが四十二年に催された、須磨浦山上公園の野外展であった。海から吹上げてくる風雨、ロープを使っての搬入、その上一カ月間の長期という悪条件を克服しての作品展であっただけに、オープンに催された須磨観光ハウスでのパーティには近畿の花道家多数の参列と讃辞を受け兵庫に「ぞく」あり、と全国的な反響を呼ぶまでに成長していった。ちょうどその時期に、財団法人日本いけばな芸術協会が誕生した。が、ぞくのメンバーのほとんどが同協会の評議員、特別会員に推選されたことで、もはや、若手などとあまったれてはいられない。いけばな作家としての自覚と責任は重大となってきた。そこにあって、各自心機一転、今一度ふり返って原点を探究することによって新路を開こうと、古事、美術などの専門講師を迎えての研究の傍ら、静かな内面的活動を続けたが、四十五年、またまた動に転じ、神戸みなと祭協賛の野外展を王子動物園に開催する。と同時に、同園野外ステージにおいて瞬間いけばな造形の実演を行ない、話題を呼び起こしたのである。

その頃には兵庫県いけばな協会の、ほとんどの役席には「ぞく」のメンバーの顔が並び、同協会も完全に若返っていた。以来今日まで、新人発掘を目指して活躍を続け、現在同人十五名。四十九年五月中旬に相楽園にて開催予定の、竹を主材にしたいけばな造形展を目標に、竹博士とまでいわれる竹の権威者、京大名誉教授上田弘一郎先生のご足労で竹と取組み、竹と人生の勉強中、期待されるグループ「ぞく」である。

装いは　人間自身をあらわす。

金 柴田音吉洋服店

神戸・元町４丁目南　神戸 341－0693
大阪・高麗橋２丁目　大阪 231－2106

きものと細貨

おんがら屋

神　戸

西　店／三宮センター街・電話 331－8836(代)
東　店／三宮センター街・電話 331－0629
三宮店／さんちかタウン・電話 391－4303

東　京

銀座コア店／４階着物コア・電話573－5298（代）
渋谷東急店／５階和装名家街・電話462－3409（直）
日本橋東急店／４階和装名家街・電話211－0511（代）（内線294）
池袋パルコ店／４階着物小路・電話987－0561（直）

□れんさいずいそう〈13〉

酒は灘

楠本憲吉
〈俳人〉
え・貝原六一
〈行動美術協会々員〉

大阪船場の料理屋で生まれ、灘で育ち、酒屋の経営する灘中を出て今日まで随分と酒に親しんできたのであるから、私にも酒を語る人並みの資格ありと自負している。

ところで「酒は灘」といわれる「灘」とはどの地方をさすのか。

東は武庫川口より、西は現在の三宮駅の東、生田川の近傍に至るまでの、およそ沿海二十四キロばかりの瀬戸内海沿岸地域の総称をいう。また「灘目」ということばがあって、これは「灘辺」の転訛したものらしいが、この「灘目」は「上灘目」と「下灘目」に分かれ、さらに「上灘目」は東組（青木・魚崎・住吉）、中組（御影・石屋・東明・八幡）、西組（新在家・大石）に三分した。上灘三組と下灘（灘区）と今津、この五つを総称して灘五郷といったものであった。もっとも現在の灘五郷は今津・魚崎・御影・西郷・西宮のことをいう。

では灘の生一本はなぜいいのか。その理由として、㈠宮水の水、㈡摂播の米、㈢吉野杉の香、㈣丹波杜氏の伎倆、㈤六甲の寒気、㈥摂海の湿気があげられている。

「灘香」ということばがある。これは「枯らし酝」という灘独特の酒造法で出てくる一種の香りのことで、灘酒の持つ親しみ深い芳香をいう。

灘の生一本のメリットを支える条件の筆頭にあげられている宮水とは——

西宮市の海岸から約一キロくらいの地の、五〜

六メートルくらいの浅井戸に湧く水のことをいう。これは天保十年に桜正宗の二代目山邑太左衛門により発見されたものである。

この宮水発見のいとぐちは、山邑太左衛門は東の西宮と西の魚崎に酒造庫を持っていたが、つねに西宮の製品の方が優れているのを不審に思い、ある年、相方の杜氏をかえてみたところ、やはり西宮の方が優れている、そこで思い切って西宮庫の用水を魚崎に運んで作らせたところ、果して西宮同様の上酒が得られ、その原因が水にあるという決着を得たという。（山田正一編著『清酒工業』参着）

この不思議な水、宮水の正体を解明したひとが京大松原厚理学博士であった。

博士によると、この水は三方からの影響をうけて出てくるのであって、そのひとつは、近くの夙川の伏流水が西宮戎神社の下あたりをぬけて、はいって来たもの、もうひとつの流れは、北の方、有馬や宝塚など六甲山の炭酸塩を含んだ砿水、最後のひとつは、海から塩分を含んだ水が浸透してくる。これらの三つの水が地下でまざって出てくるのが宮水であるとのこと。しかも、六甲方面から来る水には、がんらいたくさんの鉄分が含まれているが、これが酸素を多く含んだ夙川の伏流水によって酸化され、宮水の直下の地層に含まれる厚い貝殻の層を抜ける間に完全に除去されて出て来、宮水に多い燐酸や加里は、酵母の養分として工合がよいのであるが、これは六甲山の燐灰石に由来するとのこと。（坂口謹一郎著『日本の酒』参着）

私の少年時代、御影や東明の浜には大きな仕込桶が干し並べてあり、酒蔵の並ぶ路地にひんやりと酒の香の漂う、静かに澱んだ落着のある町並みであった。

当時の酒屋が出す酒粕はまだ十分に酒の絞れそうに豊醇なもので、この粕を使った粕汗はいかにも京阪神らしいリッチな味のものであった。まことに庶民的な寒の味覚で、塩をしたブリとコンニャク、ダイコン、ニンジンを入れた熱い汁をフーフー吹きながら食べる。酒の粕に黒砂糖をはさみ、炭火でこんがりと焼いたおやつも、懐しい味である。

酒粕といえば、酒を絞る酒袋は強い木綿を柿の渋で染めあげたもので、私の母がこの端切れでハンドバッグや買物袋を仕立てていたことを思い出す。

亭主持つなら上方商人　女房もつなら京女
酒を飲むなら生一本

とうたわれた灘の酒造もすっかり近代化してしまった。

工場の最上階から白米を入れる。ベルトに乗った完全な流れ作業とステンレス・スチール製装置の連続で、洗米、水切り、米蒸し、冷却、製麴、醪酵という作業工程を経て、できあがった新酒が貯蔵タンクにおさまる仕掛けになっている。

この技術革新につれて、戦後の酒はそれぞれの銘柄の独特の持ち味がなくなり、全国的に画一化してしまったともいわれる。この画一化、均一化された味の特徴は何かというと、愛酒家の喜ばぬ「甘口」ということになるのだろう。

□れんさい随想〈最終回〉

ブラジル無宿

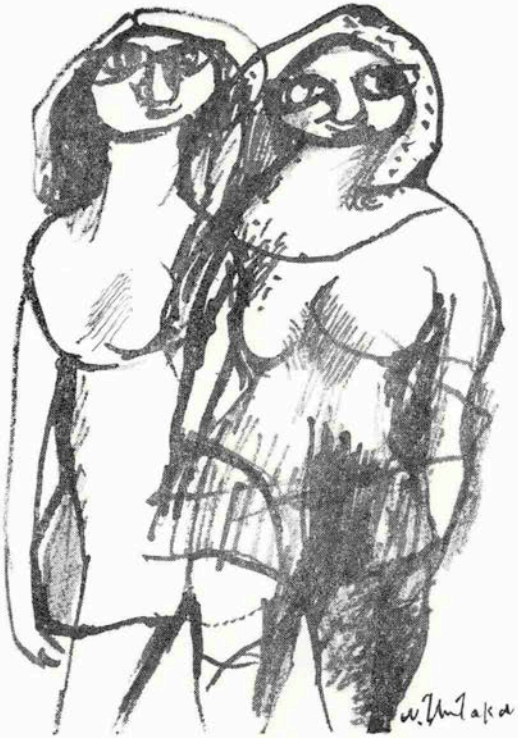
津高和一（絵と文）
〈画家・大阪芸術大学教授〉

昨日サンパウロのK女史からクリスマスカードが届いた。今年ブラジルを訪問されなかったのはヨーロッパにでも行かれたのでは――、という添書きがしてあった。

彼女とも十年来の知友である。一九五九年あるぜんちな丸で同船して渡航したとき以来である。当時はまだ移住者の群は全国から相当数集まってきていた。

日本経済がばか景気の高度成長などという言葉もない以前だったからである。それでもその前兆は何処かで潜んでいた。以来年々移民の数は下降線をたどった。そして国内の異状なばか景気は掛け声よく驀進したのである。

海外へ企業や商社の進出が目覚しくなり、海外旅行の団体でノオキョウ（農協）という固有名詞が馬鹿さかげんの代名詞のように国際的にも顰蹙を買い、或は一躍巾



を利かすようになったのもそれから後のことであった。
企業のがめつい商法がエコノミーアニマルというありがたくない僭称まで頂載したのもその頃からであった。
日本列島の避遠の地にいたるまでこの気風にとっぷりと浸ったというのが現実だった。どれもこれもが永年にわたる貧乏暮しから浮上し、脱出したいという心情が、隣を意識し、恰好を考え、マイホームというこちょこちょとした平穏無事を想定においたのである。
おしなべて都会も田舎もない画一的な思考と感覚は、屋上に林立するテレビアンテナが象徴的な風景でもあった。
自我意識の欠落だった。これではブラジルの原野とも無縁になるのは当然だった。避地の十間切れ農地にまで機械化が進み、文化生活?を求めて相変らず都会への流入者は後を絶たなかった。
いったい文化生活とは何なんだろう、と問いたくもなる。最近まで、日本では美術ブームと称する怪しげな風が吹き荒れた。それは虚妄に満ちた粉飾で終始していた。あたかも誇大広告のそれに似ていた。字句通りの美辞麗句で歯が浮くおもいがしたものである。
それほど慾しくもないものに、万金を投じて平気な顔をした。金がだぶついていた、と云えばそれまでだったが。底を洗えばよい恰好であると同時に、利殖につながる両面作戦のようなものがあったと思う。破局がくるのは当然だった。気の毒だったが世俗の権威や、甘言に便乗しそこなったのである。変な世評と、助平根性が、芸術とは無縁であることを証明したようなものである。
日本国から見ると後進国のようなブラジルでも、そのような馬鹿げたことはなかった。
無縁の衆は、芸術とは無縁であくまでもあっけらかんとしていた。反面、好きなものは日参してもそれを慾しがった。
要するに、好きか、嫌いかがはっきりしていたのである。もともと自分の生活に他人の容喙は許さなかった。
僕は最近の日本人には頑固さが失くなったような気がしてならない。まちがいなく、もの笑いにならないように、という気持ちが出足をにぶらせているのである。
人間のやることだから時にはまちがいもあると思う。それを恐れていては思いきったことは出来かねる。他人の顔色ばかり気にしていては平均的人間のくそ面白くもないご面相と鼻つき合わせているばかりだった。
粗野ではあったが、ブラジルの何処を歩いていても綺麗ごとの人間には出会わない。そのようなことが僕の足をそちらに向けさせる原因にもなっていた。
昨夜、東京の新制作座のK氏から電話があった。僕がサンパウロで泊ることにしている日本人街のホテルのことを聞かせてほしいということである。女性の一人旅であのホテルが便利でよいからということだった。
ガルボンヴエノのあのホテルもいまではレストランEの主人が手離して他人に渡ったこと、スーパーや南米銀行、日本のレストラン等が近所にあって日常生活には何の不自由も感じないのがとり柄だった。
おもえば最初サンパウロに行った頃からとは随分変ったな、と思う。日本でも十年と言えば一昔も二昔にもなる。だが最近でも夜になると坂を降りたあの辺りには夜の女たちが辻に立った。一人歩きは時たま掻払いに会った。日本流のすし屋や、酒場が夜おそくまで営業していた。ホテルの近くを高速道路の工事が陸橋の下で間断なくつづいていた。ブルドーザーが気忙しく動き廻っていた。黒人たちの動く様を陸橋の上から見物人が飽かず眺めていた。
来年の九月にはサンパウロのギャラリードクメンタでの個展をまた約束している。アンデスを越える飛行機からの眺望が、御存じアマゾン支流の白く光る蛇行と、広漠としたジャングルの白い雲の浮遊を先取りして頭の中でちらつくのである。そんなとき僕はいまさらのごとくおもうのである。現代の無宿人とはこのような状態を指して言うのではなかろうか、と。

□ずいそう

ニッポンとニホン

小林 芳夫
〈㈱北摂コミュニティ開発センター社長〉
え・貝原 六一
〈行動美術協会会員〉

この間、神戸ロータリークラブの例会の時に、オーストラリアの交換学生のお別れの挨拶があった時に、日本のことをニホンといっておりました。そのように学校で教えたのでしょう。が、会長の田中健一郎さんは挨拶にニッポンといっていました。

この頃、テレビやラジオのアナウンサーは、日本人をニッポン又はニッポン人、対談している学者、政治家又は評論家の多くは、ニホンとニッポンをチャンポンにつかっているのが、私は耳ざわりでなりません。総理大臣でも同様です。

私は旅行によく飛行機を利用しますが、日本航空の場合、スチュワーデスや機長がニホン航空と発音しています。それが正当なら良いとしても、全日本空輸の呼び方を「全日本空輸にお乗り継ぎのお方」と言うています。「全日空」と言うなら問題はないでしょうが、ALL NIPPON AIR WAYSと明かにニッポンであるべきでしょう。

私の関係している「ボーイスカウト日本連盟」の英文呼称はBOYSCOUTS OF JAPANでありましたが、元総長の久留島秀三郎氏はジャパン追放を提唱されて、日本連盟の英文呼称をニッポン連盟と統一され、BOYSCOUTS OF NIPPONと世界連盟に登録されたのですが、日本語では、ニホン連盟、ニッポン連盟と二つ発音しています。もちろん国の序列を定める場合はジャパンとして取扱われています。それ以来、外国ではボーイスカウト・オブ・ニッポンと発音しているのに、ニホン連盟と通訳していることもあり、ニッポンは外国語でニホンが日本語であるのかと、皮肉を言う者もあります。前述の全日本空輸の場合と同様です。

かつて、佐藤首相は日本は「ニッポン」と称することにする、と言うたことがありますが、実行されていません。

国の発行する郵便切手にも、明らかにNIPPONと印刷されているのにどうしたことでしょうか。ジャパンやヤポンの発音からでもニッポンの発音が良いと思います。

日本銀行券の裏面にはNIPPON GINKOと印刷してありますから、ニッポン銀行と言うのが、正当ではないでしょうか。日本銀行の人達のおはなしを聴いていても、ニッポン銀行とか、ニホン銀行とか統一されていないようです。

私は、日本人が自分の国の呼び方を、ニホンとしたり、ニッポンと言ったりする不統一であることが、国に対する国民の民族意識が不足している証左ではないかと思う程です。

ある人は、ニホンでもニッポンでもどうでもよいのではないか、日本にはもっと大きな問題があるじゃないか、語呂がニホンと言い易いから問題にしなくてもよいと、一笑に付する人もあります。しかし、私は自分の国の呼び方に統一を欠くような国民の現状だから、あるイデオロギーにおされて、国旗を「日の丸の旗」と言ったり、「君が代」をはっきり国歌とし得ないような事態になっているのだろうと思います。

日本国は明かにニッポン国であります。けっして大日本帝国の復活調でもないのです。

日本橋をニホン橋、ニッポン橋と、言い方が関東、関西で異なっている。

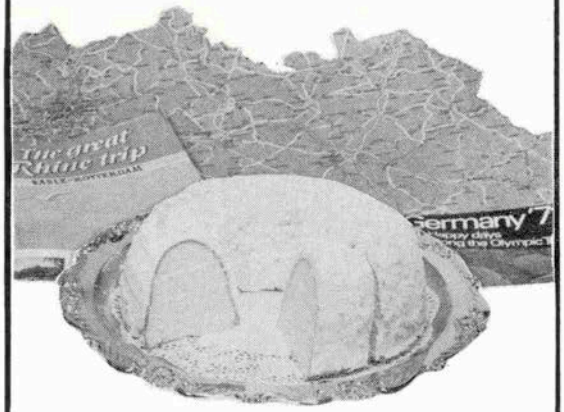
例えば「お江戸ニホン橋」のように、しかしこれは日本を表わすものでなく、日本橋という名称ですから、ちがってもよいでしょう。日本海は日本を表わすから、ニッポン海と呼ぶのが正しいでしょう。

すくなくとも、日本銀行在職者、旧友の人達だけでも、日本銀行を「ニッポン銀行」と称するように統一して欲しい。それでなかったら、日本銀行券の裏面にはTHE BANK OF JAPANと印刷すべきではないでしょうか。

また、郵便切手の表面のNIPPONはJAPANとしたらどうでしょうか。

筆者

フランクフルトの
白い冠
上品なバターケーキです。



フランクフルタークランツ

ドイツ菓子
Fuchheim's
ユーハイム

このマークの店でお買求め下さい

本　　店	三宮生田神社前	TEL(331)1694
三　宮　店	三宮大丸旧市電筋	TEL(331)2101
さんちか店	三宮地下街スウィーツタウン内	TEL(391)3539
貿易センタービル店	三宮貿易センタービル地下1階	TEL(251)0139

お子様の幸福を願って……

ひな人形

夢多きお子様へ
優雅な
愛の心と
ほほえみを託した
ひな人形を

カメヤ

三宮方面でのお買物は……
さんちか店　ファミリータウン　391－4045
三宮店　市街地改造のため仮設店舗にて営業中
元町方面でのお買物は……
元町店　元町通3丁目山側　331－0090
パンプウ店　元町通1丁目不二家前　391－0768

★神戸っ子鼎談

慌てるな〝石油危機〟

今井　栄泰〈川崎重工㈱開発本部・部長〉
梶木　豊二〈神戸市・衛生局長〉
諸岡　博熊〈阪神外貿埠頭公団・工務部長〉（五十音順）

★ニューエネルギーの模索あれこれ

諸岡　石炭や石油はいつかはなくなる。このため太陽熱などの無限のエネルギーを有効利用しようというニューエネルギー開発の機運がアラブ諸国の石油供給削減以来世界的に盛り上ってきました。わが国では通産省によるサンシャイン計画があり、太陽エネルギー、地熱、合成天然ガス、水素エネルギーを利用した発電、冷暖房システムの技術開発が行なわれております。

そこで、このたびのエネルギー危機で三つの大きな教訓を得たわけです。

その一つは、地球上の資源は有限だ。その二に、第二次世界大戦で苦い経験をしながら、石油にドップリとつかって、不安定供給であわてふためいた。第三に、化石燃料のもたらす環境汚染の防止の三つです。したがって、これから、一に資源として相当量存在するエネルギーを探すこと。二にわが国の主権下にあること。三にクリーンエネルギーであること。四に技術開発の波及効果の大きいものであることなどが、ニューエネルギーの中心課題となっていくのではないでしょうか。

梶木　第二次大戦の話がでましたが、油断大敵という諺があるように油を断たれると大変なことになる。あの戦争の頃は六百万トンの石油がなくてオッパジめたのだろうと思われます。それが今や石油需要が年間二億トンを越し、三億トンもの石油を輸入している。

たまたま私は公害関係の仕事をしていろいろ公害防除技術をやりましたが、ゼロにはならない。そこで全部を石油に切り換えるのではなく、使えるものは有効に、使い捨ての態度はやめて、ものはすべて勿体ないと考え、さらに一歩進めて廃品はすべて回収して再生原料とする。したがって、最小限の石油でやっていける方向を考えていきませんと、すべてを外国に依存するなんて、自主性がなさすぎますよ。要はどう生き抜くかですよ。

私は子供の頃から太陽エネルギーに興味をもっていましたし、公害の仕事をやりだしてからますます必要性を痛感いたしました。

ご承知のとおり地球上の生物すべてが太陽とともに栄えてきたのですから、いまや人類が太陽を再認識しないとおかしいですよ。そりゃ太陽エネルギーは使いたいですよ。簡単に使えるならとっくの昔に利用していたことでしょう。なかなかうまく使えない。たとえば日照は昼間のみで雨の日もあるということです。それをなんとかしてうまく捕まえて電力に変えたり蓄熱できたりすると、我々の家で使う位のエネルギーを太陽熱でなんとかまかなえるのです。そうすれば、あと四、五十年といわれる化石燃料の食い延ばしができますよ。オイルショックで慌てることはありません。

これも考えてみると、何億年かの地球での太陽エネルギーの蓄積ですよ。それをもっと上手に使わなくちゃいけませんな。生命の基盤は太陽と水です。エコロジーの

今井栄泰さん

接エネルギーを得ることなど。ところが、原子力は核分裂でしょう。放射性廃棄物の取扱いが問題で、西歴二〇〇〇年頃に実用化される核融合をまたれますね。

先程、油断大敵とうまく表現されたのですが、今までは、木炭と石炭、石炭と石油といった併存だったのが、いつのまにか炭鉱をやめちゃって、油にドップリとつかった。併存しておればこんなにあわてふためくことはなかったのですがね。ドイツでは未だに褐炭を掘っておりますよ。もちろん、水素添加で原油にはしていますがね。二十世紀初頭のルルギプロセスが多角的エネルギー源の一つとして生きております。

諸岡 デマやうわさであわてふためくとはね。トイレットペーパーしかり、豊川信用金庫しかり。精神的に不安定な基盤が社会のなかにあるのではないでしょうかね。

さてこのあたりで、機械メーカーさんの立場から、これからの機械のあり方をお聞かせ頂けませんでしょうか。

★エネルギーの多角的利用を考える

今井 機械メーカーが常に考えていることは、機械の効率のアップ、つまりエネルギー源を最小にして最大の効率をあげる。そのエネルギー源を油だけに依存していたから今日の危機を招いた。打撃は日本ばかりでなくて、大なり小なりあらゆる国が受けた。私は石油危機をきっかけとして世界的にエネルギー変革の時代に入ったんじゃないかと考えますね。単純に油が入荷しないんだと軽く考えてはいけないと思います。

今後は、エネルギー源の多角化ですね。いろいろのエネルギーの競合文化時代となります。多角化にはいろいろありますが、まず、石油供給源の多角化。つぎに、エネルギー源の多角化。当面考えられるのは原子力であ

基本もこの二つにつきます。エネルギーは太陽と水との組み合わせによるエントロピーの小さい形であるのが理想であり、自然です。

今井 残念なことに太陽エネルギーは地表面で一平方メートル当り一キロワットアワーの低密度エネルギーです。実際には日本の緯度で〇・一キロという低さ。追尾装置をつけても二倍位で知れてますね。それから太陽エネルギーによる発電のシステム。蓄熱するシステム、いわゆるエネルギー変換システムは大変な技術です。太陽熱の他に地熱エネルギー。しかし、これはイタリアが先進国です。中部のラルデレロですでに三十九万キロの発電をしている。日本は現在ほぼ四万キロ程度です。

梶木 ニュージーランドで約二十万キロの地熱発電……。

今井 アメリカは約三十万キロです。ところが、アメリカやメキシコでの地熱発電機は日本製が進出しておりますから、この方面もたのしみがありますよ。

太陽や地熱の他にエネルギー源として、水力、潮力、風力、オイルシェール、オイルサンド、天然ガス、原子力、水素などが考えられますね。いわゆる未利用資源の活用かエネルギーの変換、つまり回転機によらないで直

り、水力発電の電源の練り直し、石炭のガス化による利用。

それとは別に、今まではエネルギーの使い方を個々の機械についてのエフィシェンシーアップ、いわゆるエネルギーの最小利用で最大効率を追及してきた。それをエネルギーの徹底的な利用技術の開発が必要です。つまり、公害防除も兼ねて廃棄物が出なくなるまでそのエネルギーを徹底的に利用することです。

梶木 確かにそうですね。いま発電所では温排水が問題となっています。それでエビを飼ったりなどしていますが、もっと利用方法を考えるべきですね。

梶木豊二さん

諸岡博熊さん

今井 廃棄されたエネルギーの再利用技術を我々は考えておりますが、急には実現しないでしょうね。

梶木 むだむだエネルギーを捨てるのですから、そしてそれが環境汚染の問題になっているのです。ぜひとも研究開発を進めてほしいですなあ。

今井 その上、太陽エネルギー技術開発は絶対いる。

梶木 太陽エネルギーで今のところ利用されているのは夏場の風呂の湯ですか（笑）。それだけであまり利用されていませんなあ。ああそうそうビニールハウスも。

諸岡 太陽エネルギー、地熱の他に水素エネルギーがありますね。海水中にも重水素やトリチュウム（三重水素）などが無限にありますから、水素エネルギーの活用を考えるべきです。水素化時代は目前ですよ。

梶木 そうです。地球上にあって消滅しないものといえば太陽と水ですね。光と水があってこそ我々生物は栄えてきたんでしょう。

太陽熱の利用は一九〇〇年の初めから実用化が試みられてきました。とくに寒い国でね。熱い国では太陽があるが水がない。砂漠に水がないので人間が生きていけない。そこで海水の淡水化をしてじゃんじゃん飲み水をつくっている。ただし油を使ってですが。これも太陽熱をうまく使えば油が浮いてきますね。

今井 結局、石油が非常に安いからでしょうね。それを日本人がうまく利用して今日の繁栄を築いた。ところが石油をトコトン利用したので、オイルパニックを受けた。

梶木 これは日本人の性格じゃないでしょうか。廃仏毀釈をやったり、簡単にポンとものを変える性格ですな。

今井 日本人は適応性がいいんですよ。変わり身

が速い。

★心の本質を今こそ見直すべきときだ

諸岡　今こそ日本人の特徴である適応性を捨てないと。みんながこんどの危機でめいめい勝手なことをしていたらとうてい乗り切れないのではないでしょうか。この適応性の底にあるものは、自分一人なんとかなりさえすれば他人はどうなってもよいというエゴイズムがあります。

　僕は鐘がカンと鳴ったら素直にカンと心に感じる態度が必要だと思いますよ。あの鐘の音はニゴッている、音色がおかしいなどの態度は、方向をまちがわせるのではないでしょうか。オイルショックで騒ぐ前に持つべき心構えを欠いていますよ。本質を見直すべきときですね。

　座禅はよく知りませんが、素直なまじり気なしの心の状態になることではないでしょうか。座禅しているときの脳波は新生児の脳波と同じだそうですね。つまり、精神的に目覚め、肉体的に寝ている状態で新生児の第三の意識といわれるものです。このときが基礎代謝の消費量が一番少ないらしいですね。

　アポロのとき宇宙飛行士が宇宙船のなかで、酸素の消費量をできるだけ少なくしようという計画があり、日本から禅僧が呼ばれたがうまくいかなかったらしい（笑）。それ以後、アメリカでは禅が大はやりとか（笑）。

梶木　北満でも実験したときの基礎代謝を測ったんです。零下四十度のところでの座禅ですから、動いたり大きな呼吸をすると凍るんですからね。生きる最低限の代謝量です。おもしろいことに、体の表面に自分の体温による膜ができるんです。スーッとね。それで寒さに耐える。

諸岡　氷河時代を生き抜いた動物の保温能力ですな。基礎代謝をなるべく少なくするということは、これからのエネルギー節約時代にマッチしているかも知れまへんな（笑）。人間はここまで素直になってエネルギー節約を耐え抜こうとしていますが、これからの機械は、そのあり方はいかがですか。チラッとでも結構ですから目下開発中のニューエネルギーの機械のお話でも。

今井　機械そのものは最小のエネルギーで最大の効率をあげるのが理想ですから。そのために技術屋ががんばっているんですよ（笑）。その時、その時の時代の要請に応たえて全力投球していきます。ただこれからはますますシステム化することでしょう。

梶木　そのシステムが問題だと思いますね。ボタン一つ押しまちがえたら全体がガタッとなるのでは。

　私はシステマティックにつながった形というのは閉ざされた社会という気がするんです。これからは開かれた社会でなければならないと思っております。

　たとえば、大きな発電所を一か所に建設すると、その立地する地域住民は他の地域住民のための発電所の犠牲になることはいやだという感情を持ちます。したがって、各地域ごとに必要な量だけに見合った小さな発電所を建設するのがいいのではないか。全体としての調和もいりますがね。

★水素文明時代の到来はそこにきている

今井　これからのニューエネルギーとして、太陽電池、燃料電池、プラスチック廃棄物からの原油再生、地熱発電、合成天然ガスといった方向にいくでしょうな。太陽電池は太陽エネルギー利用に欠かせません。EEカメラに使っている親玉。燃料電池は水素をもとに各家庭で電気をつくり出すという画期的なもので、生活革命に結びつくし、将来は太陽炉から水素エネルギー製造に関連していきます。プラスチック廃棄物からの原油再生は資源不足を補って、同時に水素の研究に結びつきますね。したがって、これらが育っていけば将来の太陽エネルギー利用、水素エネルギー経済への強力な核となります。い

ずれもクリーンエネルギーとして公害対策の極め手（笑）。

諸岡　なるほどね。大阪ガスが実用化実験中のパワーセル一一はあと数年で実用化しますから、まさに、水素文明時代が到来しているといえますなあ。

　これからの方向ですが、大きな発電プラントから供給されたり、アラブという点から油をもってきたりという、点から面への使用でなくて、供給者即需要者という方向にいくのではないでしょうか。面でうけ面で使う。たとえば、太陽エネルギーは各ビル、各家庭で個別に受光板を置いて使っていくという方向ですね。太陽熱で水を分解して水素エネルギーと電気を取り出したりして、多角的にエネルギーが入手できる。そうすると、現在の独占的な電気事業法の改正も必要となってきますね。なにしろ、われわれは関西電力さんには弱いですからね。

梶木　電気を売っていただいている（笑）。

諸岡　とにかく我々は光としての太陽エネルギー、それから水素と酸素の化合物である水の利用をしなさすぎますね。地球へ太陽エネルギーが百くるとすると、六〇が大地に吸収され、四〇が空気中に反射しているのですから、その二〇でも利用したらと思います。とくに、植物は葉緑素の働きで、太陽エネルギーを受け水と炭酸ガスからデンプンをつくります。この光合成の過程で水を酸素と水素に分解しております。したがって、植物は太陽エネルギーを人間の食糧に変えておりますから太陽エネルギーを人間の燃料に変える知恵がほしいですね。植物の同化作用の応用をね。

慌てず石油危機を乗り切ろうと語る左より諸岡、今井、梶木の各氏

今井　地球では空気層があるために太陽熱の吸収エフィシェンシーが非常に悪い。そこで空想的なことをいえば月で太陽光線を集めて、太陽熱を蓄積し、それをエネルギー化して地球に送ることが考えられます。現にＮＡＳＡの計画で宇宙空間約三万五千キロの軌道上に、五キロ平方の受光板をもつ人工衛星を打ち上げ、地球にマイクロビームで電気を送る。地上で受電されたマイクロビーム電力は商用周波数に変換されたのち一般の消費家システムに供給されるというものですが、商業ベースに乗るのが一九九二年といっております。

諸岡　ＳＦ的にいえば対島海流を南方で流れを変える柵を海中に設けて、日本列島全体を暖かくしようというのやら、ベーリング海峡の締切りなどがありますね。こんな夢も実現するのは何十年も先のことでしょうが、今日のエネルギー危機を克服するためにもぜひ急いでやってもらいたいですね。

今井　それを今ただちに我々の年代に求めるのは無理ですよ。年がいきすぎている（笑）。

諸岡　機械メーカーの開発の担当部長さんからサワリでもよいからあすの技術の具体的なお話を聞きたかったのですが、企業秘密の壁が厚くて残念でした（笑）。つぎは、我々のようなドシロウトでなくて、専門家に今井さんの口を割ってもらいましょう（笑）。

　いずれにしましても、石油不足をいい教訓として、本質を直視することが大切ですね。いたずらに、トイレットペーパーでみられたデマやらうわさなど扇情的な風潮に動揺しないようにしたいものです。少なくとも浅薄な行動だけは避けることとしましょう。

〈竹葉亭にて〉